

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成20年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第48巻3月号(通巻584号)

風土



3

冬の蝶
神蔵器

初日さす青き地球の杉並区
冬の蝶三尺飛んで天といふ
八方の山に音あり鏡餅
牡丹囿ふ十年同じ藁をもて
み仏に寒夕焼の炎立つ

無言館に成人式や底冷す
遠くより雪のこゑして寒満月
一途なるものは美し薺粥
豊かなる白息をこそ信じたり
大寒やふくみて水のやはらかき
水音の奥へ奥へと探梅す
近海に魚貝の睦む良寛忌



竹間集

同人作品



数へ日

編集室

塩田 博久

数へ日や珠の原稿殺到す
歳晩や惜しみつ捨てて古雑誌
常の事して数へ日の妻と居り
長々しき京都の宛名賀状書く
数へ日や厨に貼つて火伏護符
おのづから餅焼く役と決まりをり
スーパ―に琴唄流れ若菜籠

除夜詣

高橋 邦夫

病室に爪切る音や冬あたたか
極月や家計簿隅へ走り書き
立冬の灯をちりばめよ田舎銀座
冬鵬や病後散歩の小公園
綿虫を見失ひたる列車音
歳末特売揺れつばなしの銭の箆
老ふたり猫の子歩きの除夜詣

赤い手袋

代田 青鳥

手袋の片方ばかり残りけり
目印の赤い手袋見せ合うて
七草の七引く三でよかりけり
マスクして同じ眼をしてゐたり
紙漉きの村を灯して婚一つ
さみどりの色を零して七日粥
音消して大河流るる大旦

百 千 鳥

— 島谷 征良 —

いつせいに風にふるへぬ犬ふぐり
鶯笛末の子ももう大きくて
雛市や漆にほひて灯の明き
春愁や落款のみなかたむきて
まじはらぬ径ふたつや斑雪
寒さまたミモザの花をおそひけり
花の色秘めて浅蜷の売られけり
上総はや田に水張つて花辛夷
お彼岸もはや夕空の茜いろ
春祭のつぴきなならぬ雨となり

ひこばえや山羊は一日つながれて
一芸のはたして如何に新社員
花ぐもり花びら色の餅を買ふ
花明り孔雀眠りに就いてをり
雀らも花にこもりて花こぼす
一杯の水もてあます花疲れ
山裾に古き祠や百千鳥
てのひらにほろりと雨や花祭
七色に空を映してしやぼん玉
峡訪へば一月遅れつくしんぼ

山河集

同人作品



神蔵器選

師走来る傾山も由布山も
木枯に吹き寄せらるる海の音
冬の滝こころの中に水流る
枇杷の花咲く廊下橋渡りけり
うすうすと月を残して冬日落つ

工藤はるみ

売り声の飛んで乾鮭の面構え
墨の香の尖るを鬩ぐ水仙花
城下消す天の雪蔵開け放つ
屋根の雪落つるに任す裂織女
吹雪夜はひつつみ汁を吹き合へり

石崎 浄

初詣都電ふくらみ来たりけり
かいつぶりオペラグラスに納まらず
冬ざるるプラットホームの喫煙所

山本 浪子

その中にダヴィデの如き冬木かな
初刷やはや切り抜きの穴ひとつ

天野みゆき

水鳥の日を追ふ佐久の五稜郭
久女忌や煽りて火種燃え立たず
冬すみれ箴音聞きつ蕪村訪ふ
大晦日一人住ひを招きけり
市となりて舗装されたる恵方道

黒門の太き門寒椿

及川 澄江

千両や偶に訪ひけり本籍地
凧や黒豆に水足してをり
町内の街路清掃山眠る
極月の切羽詰まりし誕生日

◇特別作品◇(抄)

武蔵野

布施まさ子

蒼天や冬たんぽぽは星のごと
埋めつくすどんぐり竪穴住居跡
薬師堂へ仰ぐ山門冬紅葉
金堂跡礎石に沈む冬の草
人去りて黄落の刻流れゆく
へらに土冬日を掬ふ僧寺跡
天平の土ひとつかみ小春空
こぶしの芽雲の流るる尼坊跡
北風吹くや鎌倉古道坂のぼる
武蔵野の空を掴みて冬櫂

風土独語／神蔵器



冬の蚊のよぎる若冲花丸図

生田恵美子

伊藤若冲の「花丸図」は、金刀比羅宮奥書院の上段の間にある。六畳の和室を囲むふすまと壁に二〇一点の花々がぎつしり並び、まさに百花繚乱の世界を演出している。

このようなところに、冬の蚊など居るものか、と思ったりするのだが、四時一定の常温を保ち、金箔や色彩に変化をおこさないように照明なども適度におさえていることだろう。明るい外光になれた眼には少しうす暗い感じで、生き残った冬の蚊が一つ居たとしても不思議ではない。ことに若冲は朱色に特色があり、青、緑、白も黄も紫も色鮮やかで、多様なパリエーション、そして少しずつ姿態を変えながら反復して描かれている。

青物問屋の旦那が、突然姿を消して、三千人もの青物売りが困り果て、挙げ句は、店の乗っ取り騒ぎまでに発展した。その失踪旦那が若冲であった。生涯妻帯もせず、出家して寺に入って修業するわけでもなく、変り者、ただ自分の好きな絵を描き続けた。「私の絵がわかる人間が現われるまで千年待とう」とも言ったというのが六十代の頃には、職業絵師でもないのに、京都では円山応挙と並ぶ絵師として評判を得ていたという。

すこしおさえ気味の照明は、いよいよ若冲の百花を浮きたた

せ、息をのむ美しさの中に、一匹の冬の蚊が百花をこの世の現実のものとして親しみを増した。

露けしや抗癌剤を断りて

三浦糸おり

抗癌剤を断る、ということはどういうことなのか。手術不能な場所、手遅れ、また手術に耐える体力がないといった場合は、医師は抗癌剤の服用をすすめることであろう。抗癌剤は現代残された延命の唯一の道ではなからうか。

桂郎先生はもう三十三年も前、「今の癌には特効薬は間に合わない」と言っ

裏がへる亀思ふべし鳴けるなり

桂郎

甘からむ露を分けてよ草の虫

〃

虫の秋眠れぬ夜はねずにあり

〃

などあきらめてあきらめて、あきらめきれずあきらめて逝ってしまった。

糸おりさんが苦しみ悩みぬいた決断であるなら、私など何にも言うことは許されないが、あきらめないで、天命も自らが作るものと思つて頑張つていただきたい。

煤迷の釣りに行かれてしまひけり

須藤美智子

煤逃げは煤払いの日、何とか口実を作つて、煤払いの労働を

避けて外出してしまうことである。美智子さんのご主人も、今年こそ煤払いを手伝ってもらおうと思っていたのに「釣りに行って来るよ！」と屈託なくさらりと言われると、つい笑顔で見送ってしまうようだ。

風土集



神蔵器選

讃岐金毘羅宮

金毘羅の長き回廊冬深む
遊虎図の薄墨に日の暮易し
冬ぬくし応挙の虎に目を合はせ
廊曲るたび短日の奥書院
冬の蚊のよぎる若沖花丸図
匂ふまで包丁研ぎて年の暮
見えぬものもろもろ見えて年の暮
短日や暗証番号押しちがふ
下駄箱の木札のいろは年忘れ
地境の八つ手の花の地より昏れ
さまざまな時間をつなぎ大根干す
銀杏散る正面にある記念館
はるかなるものへ目のゆく年の暮
ゲート座へ坂下りてゆく師走かな

津山

生田恵美子

東京

柴田久子

横浜

中村洋子

ぎしぎしと胎内の鳴る冬木立
水鳥の夜目にも水面ありにけり
伯耆より雪の来るころ三鬼の碑
はたはたと雨戸鳴る夜の根深汁
空いてゐる隣の椅子の寒さかな
空濠に日差しの届く十二月
露けしや抗癌剤を断りて
室の花医者が患者に突かれをり
父恋しきつ目の足袋の盲縞
身に沁むや人に聞かれし独り言
電線の邪魔つけなるぞ冬三日月
木枯や耳をはなれぬ音のあり
煤迷の釣りに行かれてしまひけり
留守頼む夫へ薬味の柚子刻む
飛び石は和尚の歩幅実千両
冬暖か雀よく鳴く日なりけり

津山

生田作

横浜

三浦象おり

さいたま

須藤美智子